JADE

ふくりゅう

特定非営利活動法人
日本水循環文化研究協会会報

発行責任者　酒井 彰（理事長）

令和 7 年 9 月 17 日　通巻 116 号

ふくりゅう 116 号　目次

バルトン忌 2025 が開催されました　特別企画：駐日台湾前大使・謝長廷氏を迎えて　酒井　彰　1
2025 年度（第 31 回）定例総会報告　3
第 3 回水循環文化研究発表会　座長報告　守田　優　4
2025 年度地球環境基金助成活動を開始しています　5
ムジナモ見学会のお知らせ　6
事務局より・編集後記　7

バルトン忌 2025 が開催されました
特別企画:駐日台湾前大使　謝長廷氏を迎えて

本会理事長　酒井　彰

8 月 5 日、バルトン忌 2025 が開催されました。今年のバルトン忌（没後 126 年）は、昨年離日された駐日台北経済文化代表処前代表（大使）の謝長廷氏が、バルトン忌に参加したいとの強いお気持ちがあるということを謝さんと親交の深い鄧淑晶さん（本会会員）からお聞きしたところから企画が始まりました。謝前大使には、バルトン墓所の整備ならびにバルトン基金創設でたいへんお世話になっており、バルトンの功績を日台交流のもとで顕彰することで、そのお気持ちにお応えすることとし、バルトン基金を活用して行うことにいたしました。4 月中旬より、プログラムを作成しつつ、この事業への協賛を募ってまいりました結果、日台双方の多くの企業、団体様、ならびに個人の方からご協賛をいただき、開催にこぎつけることができました。

当日は猛暑でしたが、午前中の墓参、午後の記念講演会、そして夜の懇親会（東京台湾商工会主催）と充実した 1 日でした。

墓参には、約 30 名が参列しました。墓前では、謝前大使をご紹介した後、墓所管理者である榊原明さん（バルトンの曾孫・熊本在住）のご子息である榊原衛さんからのご挨拶をいただき、参列者が一人ずつ献花をしました。猛暑ということもあり、40 分ほどで終了し、銘々午後の会場へ向かいました。

午後は、アルカディア市ヶ谷で「記念講演会」を開

バルトン忌の参列者（バルトンの墓前にて、鈴木玲子さん提供）

催しました。このプログラムでは、バルンが 1896 年（明治29年）、台湾総督府衛生工事顧問技師として、衛生工事調査を開始して以降、台湾の公衆衛生向上に多大な貢献を果たし、今も台湾の人々から顕彰されている濱野弥四郎、八田與一両氏のご子孫をお招きし、先人の功績を顕彰することの意味について考えることを主題としました。

主催者からは、上記した経緯、協賛者ならびに協力者への謝意を述べさせていただくとともに、謝前大使をお迎えしたこの事業を契機として、日台交流のもとで、これからの顕彰活動を考える機会にしたいと挨拶させてもらいました。

続いて、当日の主賓、謝前大使（現・台湾総統府資政）からご挨拶をいただきました。駐日代表 8 年間の思い出とともに、「善の循環」、すなわち、他者を助ける、恩返しをするということを繰り返していくことで、世界平和につなげていきたい、そして、バルトン先生の功績を顕彰することは「善の循環」をつくることになると述べられました。

その後、バルトン先生と台湾にご縁のある方々からの挨拶をいただきました。バルトン先生の長女多満さんの孫で、墓地管理者の榊原明さんの従弟である榊原政博氏は岡山から参加され、生前の多満さんとは葬儀が出会いとなったことなど、思い出を語っていただきました。バルトンとともに台湾に渡り、バルトン亡き後も台湾の公衆衛生向上に貢献した濱野弥四郎氏の曾孫の濱野靖一郎氏（島根県立大学准教授）は当日所用のため欠席されましたが、同僚で台湾の研究をされている深串徹氏が挨拶文を代読されました。昨年、松江バルトン会が開催した展示会（後述の岡崎氏の講演で紹介）で弥四郎が使っていたバルトンのテキストを手に取った時に受けた印象などが語られました。濱野弥四郎に師事し、水道分野での活動を引き継ぐとともに、水利事業「嘉南大圳」により、今も台湾の人々から尊敬を集めている八田與一氏の孫の八田修一氏は、父の晃夫氏が読み込んでいた「都市の医師」（稲場紀久雄著）を持参され、濱野弥四郎を通してバルトンを知ったこと、台湾の人たちによる八田與一の顕彰事業を通じて、台湾との交流を続けていることの意味について語られました。

最近のバルトンに関わる講演は、3 題。稲場日出子氏の「W. K. バルトンの妹、画家メアリー・ローズ」では、メアリー・ローズが明治 27 年の東京の風景を描いた水彩画 2 点（当日会場に展示）が日本に帰ってきた経緯が紹介されました。ともに画才にあふれたメアリー・ローズとバルトンの曾孫で日本画家であった鳥海幸子さんの命日が同じということから、130 年という時間を超えた不思議で美しいつながりについて、多くの写真とともに語られました。

稲場紀久雄氏の「バルトンの松江市衛生事情に関する復命書と台湾～主に提出年月日に関する仮説～」では、日付が抜けている復命書について、日付がない理由を 4 つあげられました。さらに、復命書の内容で重要な点は、バルトンが台湾での経験に基づいて検討した平坦な地形であっても汚濁物を堆積させない排水管の設計であり、大藤高彦による京都の計画でもこのことの重要性が記されていたと指摘されました。しかし、こうした技術の系譜が途切れ、利便性やコスト優先の設計が主流となってしまった結果、行田市で人命が奪われた硫化水素事故のような悲劇が起きていると警鐘を鳴らされました。

松江バルトン会の岡崎秀紀氏は、2024 年 10 月に「松江市における衛生思想の歴史と今」と題する特別企画展を開催したことを報告されました（展示会についてはふくりゅう 114 号参照）。展示会で資料を収集するなかで、バルトンが、下水道こそが衛生の改善に寄与する、その整備の重要性を強調していたということを学んだと述べられました。また、この展示会の『図録』を最近アマゾンから刊行されたこと、８月５日の山陰中央新聞に、その刊行についての記

講演会後の記念撮影（前列中央が謝長廷前代表）

事が、松江バルトン会会長・田野俊平氏の「コロナ禍で私たちは衛生の大事さをかみしめた。衛生思想を広めた先人の業績を振り返る良い機会だ」ということばとともに掲載されていることが紹介されました。

講演会の最後のプログラムは、「バルトン先生が拓いた日台の水インフラに関わる人の『環』」と題する座談会。登壇者は、謝長廷前台湾大使、八田修一、稲場紀久雄、岡崎秀紀、鄧淑晶（以上敬称略）で酒井が進行役を務めました。議論は、①先人の功績を顕彰するとは？②先人の功績顕彰を継続するうえでの課題、③日台でともに顕彰活動を継続するためのアイデアや決意という順で 5 人の登壇者に発言をお願いしました。水を守ることの重要さが改めて強調され、バルトンをはじめとする公衆衛生の基礎をつくることに貢献した人たちへの顕彰活動が、感染症対策にも生かされてきたのではないかといった発言があり、謝前大使が提唱する「善の循環」を築くため、今後も日台で水インフラに関わった先人の顕彰活動をさまざまなかたちで継続していこうという決意が表明されました。議論を通して、顕彰とは先人や過去の技術を称賛するだけでなく、より健全な未来の社会を築くため、公共性、衛生思想、水循環といった「価値を継承」する営みであるのではないかと認識しました。

18 時からは東京台湾商工会の主催で「謝長廷先生を囲む懇親会」が行われ、岡崎氏によるオカリナ演奏や台湾の参加者による自作の歌の披露など和やかに日台交流の場が繰り広げられました。この懇親会での出来事の一つが長与専歳のご子孫博典氏との出会い。氏が会長を務める企業グループのひとつが懇親会の看板製作を請負ったことから、「バルトン」に関わるイベントということで博典氏が参加してくださいました。懇親会を通じ日本でビジネス展開しておられる台湾の方々のバイタリティを強く感じました。

日台の多くの団体からの協賛のほか、数多くの方々のご協力によって、バルトン忌 2025 を実施することができました。心より感謝申し上げます。なお、「バルトン忌２０２５特別企画」の報告書作成を進めていますので、その刊行をお待ち願います。

懇親会で合唱する台湾の人たち

日本水循環文化研究協会 2025年度（第 31 回）定例総会報告

７月５日、午前 10 時半より、新宿ＮＰＯ協働推進センターにて、本年度総会を開催しました。以下、次第にしたがって報告します。

(1) 定足数の確認：正会員（特別会員を含む）　72 名中、出席者 13 名、委任状提出者 32 名、合計 45 名が出席、定款第 27 条（会員数の３分の１以上）により、総会の成立が報告された。

(2) 議長選任：定款第 26 条により本日の出席会員から議長を選出、宮本博司理事を選出した。

(3) 議事録署名人選任：議長より本日の議事録を確認するにあたり、議事録署名人２名の選任が諮られ、酒井彰理事長、甘長淮理事の２名が指名され承認された。

(4) 議　　事

第１号議案　2025 年度役員の承認に関する件

第２号議案　2024 年度事業報告ならびに会員の現況報告

第３号議案　2024 年度収入支出状況報告及び会計監査の承認に関する件

第４号議案　2024 年度財産目録の承認に関する件

第５号議案　2025 年度事業計画及び予算に関する件

(5) 議事の結果

<u>第１号議案</u>

酒井彰理事長より、2025 年度役員候補者が発表され、６名の理事（重任５名、新任１名）、２名の監事（いずれも重任）が全員の挙手により承認された。併せて２名の理事の辞任が承認された。その後、理事の互選により、理事長、副理事長が次のように発表された。　理事長：酒井 彰、副理事長：渡辺 勝久

<u>第２号議案</u>

酒井理事長より、2024 年度事業報告、ならびに会

員の現況報告（2025 年４月１日現在）がなされ、議長はこれらに関し質問・意見を問うたが、特になく、議場は全員の挙手により本議案を承認した。

第３号議案

酒井理事長より、当該年度の予算との対比等を含めて、収支報告が説明され、その後、佐藤八雷監事より会計処理は適正との会計監査報告があった。議場は全員の挙手により本議案を承認した。

本議題を審議するなかで、佐藤監事より、会計処理を含めた事務的労務が特定の理事に依存しているので報酬を払ってはどうかという提案があった。また、年間の運営資金が 100 万円未満であることから、会計監査の省略を検討するよう求められた。

会計監査の省略については、地球環境基金助成事業を含めれば 400 万円を超える事業費を執行していること、定款において監事の任務として会計監査があげられていることから難しいと考えられるが、監査の対象範囲に海外事業を含めるかどうか、ならびに１点目の提案を併せて理事会で検討することとした。

第４号議案

酒井理事長より 2024 年度の財産目録および貸借対照表について報告があり、議場は全員の挙手により一括承認した。

第５号議案

酒井理事長より 2025 年度事業計画及び予算について、各々議案書に基づいて説明を行った。議長はこれに対し、質問・意見を問うたところ、下記の質問と回答があった。

渡辺副理事長より、理事会ならび水循環勉強会について、これまでリモート開催を中心に行ってきたが、できるだけ対面で行うことで、意見集約に努めるべきとの意見が述べられた。その方向で進められるよう理事会としても考えていくこととした。

その後、議長は本議案を一括して議場に諮り、議場は全員の挙手によりこれを承認した。

(6) 閉会　渡辺勝久副理事長より閉会が宣言された。

総会終了後、酒井理事長より、8 月 5 日のバルトン忌の準備状況の報告ならびに参加要請がありました。また、海外技術協力部から、実施中の地球環境助成活動に関して、1 年目の活動報告と現地コミュニティリーダーからのビデオメッセージ、2 年目の活動がスタートしていることが報告されました。

（文責：酒井彰）

日本水循環文化研究協会 第3回水循環文化研究発表会座長報告

本会理事　守田　優

7 月 5 日午後、第３回水循環文化研究発表会を開催しました。当日発表論文数は３編でした。以下、座長から報告します（発表者の敬称略）。

１）原点回帰：大藤高彦の京都市下水道計画と水循環志向

（日本水循環文化研究協会・稲場紀久雄）

大藤高彦（1867－1943）は、1894 年、帝国大学工科大学土木工学科を卒業し、1919 年より京都帝国大学教授として工学部で構造強弱学講座を担当した学者である。稲場は、大藤の京都市下水道計画に関わる２報の報告書－『京都市下水道改良計画ニ付き報告』(1894 年 3 月)、『京都市給水方法調査及其計画ニ付報告』（1897 年 5 月）－を発見した。そして、両報告書を熟読し、そこに示された下水道計画理念を明らかにし、大藤の水循環思想の現代性に着目した。稲場は、その計画理念を今日の水循環健全化考える上での原点回帰として位置づけた。

研究発表では、大藤の計画理念から、７つの原則を導き出した。①現実的判断、②流域思考、③糞尿合併処理は将来の課題、④排除だけではなく、総合的視野で！⑤⑥汚濁物の腐敗・ガス化に注視、⑦単なる放流ではなく、利用を含む意識を！である。これらの原則のうち、特に、②、③、④、⑤は、水循環をめぐる今日の課題と直結している。特に④で雨水による地下水涵養に言及している点は驚きである。また⑤は、本年 2 月の八潮市下水道陥没事故を思い起こさせる。稲場は、大藤の報告書を読み込み、単一目的至上主義と要素還元主義を排した自身の水循環志向＜恒常性＝健全性＞と結びつけ、流域総合水循環計画に沿った施設整備を目指す大転換期として原点回帰を強調した。

２）『親子一緒に参加する自然体験講座』、参加者は延べ 6,800 人越え

（日本水循環文化研究協会・佐藤英雄）

佐藤は、東京都練馬区の石神井川において、平成 16 年、『親子一緒に参加する自然体験講座』を立ち上げ、22 年間、代表者として活動を継続してきた。この研究発表は、その 22 年間の活動内容と評価を報告したものである。

佐藤は、「川と水辺を愉しむプロジェクト」として、練馬区の助成やＰＲ手段を活かしながら活発な活動を展開してきた。①みどりと水辺環境の維持・保全と

SDGs 活動、②親子一緒に参加する自然体験講座の継続、③五感を使って遊ぶ昭和の自然遊びの復活を目指して、④実践的大人の自然体験塾講座などである。講座参加者は、延べ 6,800 人を超えた。

地域住民、子どもを対象とした水辺遊び、川遊びの環境活動は、水循環文化という観点からきわめて重要である。しかし全国の親水活動多くのケースでは、参加者が集まらない、活動主体が高齢化して継承が困難になったなど、さまざまな問題を抱えている。佐藤は、住民とのコミュニケーションを密にすることを心がけ、住民の提案を受けながら、新たなプログラムを創設し、活動の質的向上と参加者の増加を目指してきた。この度、主宰者として体力的な限界もあり、第一線から退くこととなった。佐藤の「川と水辺を愉しむプロジェクト」は、親水活動のモデルケースとして大きな足跡を残したと言える。

３）都市部貧困層コミュニティにおける自律的意思決定の可能性と課題

（国立国際医療センター・菊池美智子）

バングラデシュ・クルナ市の都市部貧困コミュニティへの生活環境支援プロジェクトの成果報告である。このプロジェクトは、住民が共有する井戸や共同トイレなど、共有設備の維持管理に関するコミュニティの自立的意思決定を促すものであり、期間３年のプロジェクトである。今回はその１年目にあたる。プロジェクトは、市内３か所のコミュニティを対象に実施した。

衛生環境を向上させるための共有設備（飲み水）の共同管理と意思決定に焦点をあて、ベースライン調査、ワークショップ、設置する設備の決定と管理体制の構築、エンドライン調査を実施した。リーダーの抽出、ワークショップ、活動前後の調査には協力的な対応が見られたものの、共同管理体制の構築においては、コミュニティによって顕著な差異が認められた。コミュニティの共有施設の持続可能な共同管理を進めるには、外部の組織によってではなく、住民自らが自立的な意思決定の仕組みをつくることが求められる。今後の大きな課題である。

日本の途上国への援助・支援活動は少なくない。しかしインフラ施設・設備を設置すればそれで終わりではなく、その利用と維持管理において、住民の主体的・自主的意思決定のしくみと共同管理体制の構築が重要であると言える。

2025 年度地球環境基金助成活動を開始しています

地球環境基金助成活動「バングラデシュ都市貧困層コミュニティにおける水・衛生施設の持続的管理に向けたコミュニティの能力形成」の２年度目の活動をはじめている。昨年からの繰り返しになるが、本活動の上位目標とアウトカム（上位目標を実現するために目指す定量的成果）は以下の通り。

上位目標：

都市貧困層コミュニティにおいて、住民の衛生行動が定着し、衛生的な生活環境が持続可能となる。

アウトカム：

1) 水・衛生施設の故障頻度が低減するなど機能が維持され、コミュニティ住民の衛生行動が定着。トイレ使用後の水洗、手洗いなどの衛生行動を 95%以上の人が励行する。
2) 衛生的な生活環境の維持を担うコミュニティ組織が、故障対応、設備更新等に必要な準備を整える。その結果、設備が機能しない日数が年間の 5%以下となる。

今年度はパートナーNGO の SDA が本拠を置くポトアカリ（Patuakhali）市の４つのコミュニティにおいて活動をはじめている。これまでの活動地域のクルナ市が百万人を抱える人口を擁していたのに対し、ポトアカリ市は人口規模も小さく、個々のコミュニティ規模も大きくない。それと関連するのか、自治体政府の関与がみられること、またコミュニティの土地所有者の発言力が大きいことがクルナ市とは異なる特徴と言えそうだ。

これまでに、各コミュニティにおいて、

1) 水・衛生に関わる問題点の抽出とこれまでの意思決定の経験の把握
2) 重要と考えられる問題について原因と結果を示す図（Cause & Effect Diagram, 以下因果関係図）の作成

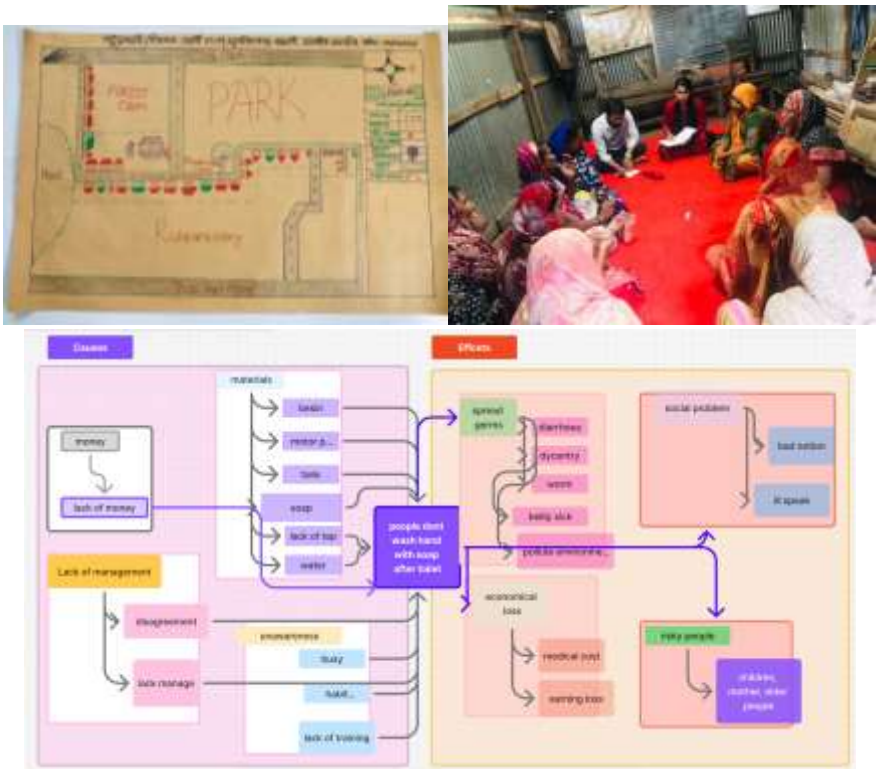
を行った。

コミュニティでリーダーと目される人たちによって、問題抽出を行い、コミュニティ地図上に問題箇所を落とした。これまで起きてきた問題にどのように対処してきたのかを訊ね、意思決定の経験を把握したのは、今後の活動を行っていくうえで考慮すべきコミュニティ特性と考えられるからである。

因果関係図では、トイレ近くに手洗い場がない、コミュニティのなかに給水施設がないなどの切実な問題が取り上げられた。原因を把握することは対策を選択するうえで必須であり、結果（影響）を理解する

ことは何のために水・衛生施設の改善し、管理するのか、すなわち上記の上位目標を認識することにつながる。逆に言えば、問題を放置すれば、期待される効果が得られないと読むことができる。これにより、モーチベーションアップをもたらすことが期待される。

因果関係図作成の場面では、リモートで観察させてもらっており、スタッフも課題の説明、図の作成の支援はするが、原因、結果の抽出はコミュニティの人たちが行っている。コミュニティの多くの人を集める啓発活動（Awareness Program）のなかで、作成に携わった人によって、因果関係図の説明してもらうことにしている。



問題箇所を示したコミュニティ地図（上左）、コミュニティでのミーティング（上右）、因果関係図（Cause & Effect Diagram）の一例（下）

この後の活動は、昨年クルナ市で行ったとおりであるが、コミュニティの全世帯を対象とした啓発活動、このプロジェクトで導入あるいは改善する水・衛生施設の決定、管理方法の議論をしていく。これまでの活動に関与してきた人たちには、管理組織を担ってもらうことにしており、施設改善やどんな管理を行うかについても主体的に決めていってもらうことを考えている。自分たちで決めたことだという認識なしでは自立的管理は期待できないのではないかと考えている。管理方法の議論と並行して、実際の工事を行う。

一方、コミュニティ組織による管理段階に入っているクルナ市では、コミュニティ組織による管理をモニタリングしている。施設の状況よりも、コミュニティ組織で生じる様々な議決事項に対して、どのようなプロセスで意思決定しているのかを主要なモニタリング対象として考えている。また、フリーライダーなど適正管理を妨げる要因を回避するため、標語の作成や管理マニュアルの成文化などを自主的に考えてもらっている。

活動はあと１年半であるが、上位目標は、３年間の活動だけでなく、プロジェクト終了後、現地でいかにさまざまな関係者とともに継続できる体制が築かれるかにかかっている。３年目の活動として「コミュニティ組織のネットワーク形成」を予定しているが、今後は、パートナーNGO に期待するだけでなく、より広い関係者とのネットワーク構築が重要と考えている。

（文責：酒井　彰）

ムジナモ見学会のお知らせ

ムジナモは、牧野富太郎博士により発見された食虫の水生植物です。今回訪問する埼玉県羽生市の法蔵寺沼はムジナモ自生地として天然記念物として国の指定を受けています。しかし、台風の影響による流出や沼の環境変化により、ムジナモは「野生絶滅」とされてきました。

本会会員の中野忠男さんが所属するムジナモ保存会や埼玉大学によるムジナモの保全活動の結果、自然増殖するようになり、2021 年には百万株もの自然増殖が確認され、埼玉県は野生復帰が実現したとして、「絶滅危惧ⅠA類」に指定変更し

ムジナモの開花
（ムジナモ保存会ホームページより）

ました。保全活動による野生復帰事例は埼玉県で初めて、国内でもまれであると言われています。

見学会では、法蔵寺沼でムジナモを観察し、中野さんからこれまでの研究の経緯についてお話をうかがいます。また、法蔵寺沼周辺は「羽生水郷公園」として整備されており、淡水魚の水族館「さいたま水族館」もあります。

見学会の日程は下記の通りです。ふるってご参加ください。このころには気温も下がって秋の一日を楽しめると思います。参加申し込み、お問い合わせは本会あてメールでお願いします。

記

日時・集合場所　11 月 1 日（土）午前 11 時東武伊勢崎線羽生駅集合、15 時ごろ解散

当日の詳しい行程が決まり次第、参加者希望者にお知らせします。

※ムジナモについては、埼玉県・ムジナモ保存会のホームページを参考にしました。

https://www.pref.saitama.lg.jp/a0508/news/page/news2025010701.html、https://mujinamo.jimdofree.com/

事 務 局 よ り

● 事務所移転手続きならびに役員変更手続きが完了

4 月 15 日付で新たな所轄庁となる横浜市より、「定款変更認証通書」（認証事項：所轄庁変更を伴う主たる事務所の所在地の移転）が届きました。その後、法務局で変更登記を行い、正式に事務所移転手続きが完了しました。その後、2024 年度事業報告ならびに総会で承認された役員の変更申請を横浜市へ提出し、役員変更手続きも完了しました。

● 過去の機関誌掲載の講演録を全てホームページから読めるようになりました

ここ数年来、懸案事項となっていましたが、機関誌掲載の全講演録がホームページから読めるようになりました。これまで「アーカイブス」というバナーをクリックしてから、アクセスするようになっていましたが、今後、機関誌は電子版を基本とするということに合わせ、新たに「刊行図書・講演録アーカイブ」というページを設けました。このページにこれまでの機関誌表紙が並んでいますので、該当号（巻）の表紙をクリックすることで各号のリストにアクセスできます。まず一度訪問してください。このページにも書きましたが、会員の皆様から講演録の紹介やレビューを提供いただき、アーカイブを通した双方向的なコミュニケーションの場を作っていければと思っています。

編 集 後 記

総会が終わって 2 か月、バルトン忌が終わって 1 カ月が経過してしまいました。発行が遅れましたことをお詫び申し上げます▶日ごろ、Edge というブラウザーを使っているのですが、最近、英文メール作成の際、生成 AI（Copilot）を同時に立ち上げておけば、どう表現したらいいかつまずいたときに複数の言い方を教えてくれるので、それらをアレンジすることで表現したかった英文が作成できるような気がします。また、送られてきたメール文中の単語の意味を訊ねると、メールでやり取りしている内容に応じた解説をしてくれます▶Zoom でリモート会議をした後も AI による割と的確なサマリーが提供されるようになり、議事録作成等の手助けになります▶AI に関わるようなことはあるまいと思っていましたが、利用しない手はないと感じています。しかし、こうしている間にもたくさんの情報がクラウドに絡めとられているというのも事実のようです▶私のような使い方で生じうる実害をイメージすることはできませんが、最終的な判断は自分でするというスタンスは維持していきたいと思っています。AI に依存してボケが進行しないようにするためにも。

（酒井彰）

特定非営利活動法人　日本水循環文化研究協会

URL: https://npo-jade.com　　e-mail: npo.jade@gmail.com

Facebook: http://www.facebook.com/groups/jadejapan/ ← メンバー登録・投稿を！

Blog: https://blog.goo.ne.jp/jadetokyo ← こちらにも投稿を！